

題目：看護師が重度認知症高齢者に提供する 口腔ケア方法選定のためのチャート作成

保健医療学専攻・看護学分野・老年看護学領域

氏名：小園由味恵

キーワード：重度認知症高齢者 口腔ケアチャート 認知症治療病棟

研究の背景と目的

高齢者は年齢が増すほど肺炎を伴う死亡率が高くなっており、認知症高齢者の増加に伴い、誤嚥性肺炎などの合併症の発症率も高まることが知られている。その原因として、認知症高齢者のセルフケア能力の低下や認知症の重症化による口腔内環境の悪化が指摘されている¹⁾。一方で、認知症高齢者に適切な口腔ケアを実施することにより、QOL (Quality of life) の維持向上が見込まれることも報告されている²⁾。重度認知症高齢者の口腔ケアは、認知機能障害により、受け入れが困難になるだけでなく、認知症の行動・心理症状 (Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia: 以下 BPSD) などの症状により、口腔ケアの実施がさらに難しくなる。そのため、これらの症状に、具体的な対応を行っていく必要があることから³⁾、重度認知症高齢者に対する標準的口腔ケア方法を確立することは、喫緊の課題であると考えられる。

重度認知症高齢者に実践している看護師の口腔ケアの現状とその方法を明らかにし、重度認知症高齢者の口腔ケアの介入方法を確定する。その結果より、重度認知症高齢者の状態に適した口腔ケア方法を短時間で選定し、実践につなげることができる簡便で一瞥で利用可能な実用的チャートの作成を目的とする。

方法

A市内の認知症治療病棟に勤務する看護師 8 名から重度認知症高齢者に提供している口腔ケアの方法を聞き取り、結果を整理した上で文献の情報と照合し、内容の妥当性を検討した。次に、認知症看護認定看護師及び摂食・嚥下障害看護認定看護師と看護師から抽出された口腔ケア方法の適切性や実用性を討議して口腔ケアチャート（案）を完成させたうえで、歯科衛生士に協力を依頼し、口腔ケアチャート利用のための手順書を作成した。その後、口腔ケアチャートの使用評価目的で、重度認知症高齢者の看護を日常業務として担う看護師 10 名に、チャートの実際の使用を依頼した。使用したチャートに対する思いや意見、課題などについてインタビューを行い、その使用に対する評価を確認した。分析方法としては、データの分析をテキストマイニングで行った。また、フローチャートの各項目をキーワードとして定め、それぞれの状態に対する介入項目について、必要性・実施・効果を認める発言において、発言頻度を求めた。次に、介入項目別に、全体評価として、必要性・実施・効果それぞれにおいて、フローチャートで選択した介入項目と、選択していない介入項目の発言の有無について割合比較を行い、必要性・実施・効果における相関を確認した。その後、状態項目と介入項目の関連性を視覚的にとらえるためにコレスポンデンス分析を実施した。さらに、口腔ケアフローチャートに対する有用性の評価として、インタビューで得られたデータから、感想や意見をカテゴリー化し分析した。

倫理上の配慮

A市内の認知症治療病棟に勤務する看護師に対する調査に関しては、B看護大学研究・倫理委員会の審査を受け承認（審査番号 1229）を得ると同時に、研究協力機関に設置された倫理委員会の審査を受け承認を得た。使用評価に対する調査においては、C大学倫理運営委員会の承認（倫

理番号 140004) を得た。

結果

認知症治療病棟に勤務する看護師の重度認知症高齢者に実施していた口腔ケア介入の現状として、461 枚のラベルを分析した結果、【口腔ケアに関する介入】【認知機能低下に関する介入】【リスク管理に関する介入】【義歯における介入】【口腔ケアにおける連携】の 5 項目にまとめた。次に、臨床で利用されている口腔ケア関連の書籍 5 冊に提示されている介入項目を確認し書籍から確認できた状態に応じた介入項目を、看護師が実施している口腔ケア項目と統合し重度認知症高齢者の口腔ケア方法を選定しやすいチャート（案）を作成した。

口腔ケアチャートの使用評価としては、必要性・実施・効果の相関は、それぞれ 0.79 0.71 0.81 であった。コレスポンデンス分析の結果は、介入状態と介入項目がほぼ近い位置にプロットされていた。カテゴリ化の結果、口腔ケアチャートに採用した介入項目は適切であり、使用しやすいとの評価が得られたとともに、チャートの使用が自己の看護を振り返る機会となり、口腔ケア技術の獲得やケア意欲の向上につながったという評価も得られた。

考察

今回作成した重度認知症高齢者に提供する口腔ケアチャートの各項目は、実践家や口腔ケア関連書籍から抽出した項目であり、重度認知症高齢者に対するケア方法として必要性が高いと考える。また、口腔ケアチャートの使用評価の結果、口腔ケア技術の獲得につながり、教育的効果があったと考える。さらに、口腔ケア介入の必要性を実感したことで、ケア意欲の向上や、病棟へケア技術の普及につなげる機会を与えることができた。また、自己の看護の振り返りの機会となり、個別性を重視したケア方法の再確認ができ、認知症看護におけるモチベーションに影響を与えたことから、口腔ケアフローチャートは、使用しやすく有用性があると考え、これらのことから、作成目的である簡便に利用でき、実用的な口腔ケアフローチャートと評価できると考える。

平野⁴⁾は、「要介護高齢者が『認知症』を有した場合、これまで整えられた『口腔』を取り巻く支援方法が効果的に機能しない印象があり、その背景には、要高齢者の口腔への支援に認知症ケアの視点が包含されていなかったことも一因と思われる」とも述べている。この言葉に従えば、今回作成した重度認知症高齢者に適した口腔ケアチャートは、口腔への支援に認知症ケアの視点を包含し、かつ、簡便に利用できるチャートとして認知症高齢者の様々な状態に適合できる具体的なケアプラン立案に効果的であると考えられる。

結語

本研究において、重度認知症高齢者の口腔ケア方法を選定しやすいチャートを作成した。このチャートの使用により、対象者の状態に適した口腔ケア方法が短時間で選択でき、統一した介入を行うことができると考える。さらに、口腔ケアへの認識が高まることにより、重度認知症高齢者の口腔ケアへの困難感の軽減につながると考える。

引用文献

- 1) Chen X, Clark JJ, Naorungroj S. Oral health in nursing home residents with different cognitive statuses. *Gerodontology* 2013;30 (1): 49-60. DOI: 10.1111/j.1741-2358.2012.00644.x.
- 2) Astrom AN, Haugejorden O, Akaret E, et al. Oral impacts on daily performance in Norwegian adults : the influence of age, number of missing teeth and socio-demographic factors. *Eur J Oral Sci* 2006;114-121. DOI: 10.1111/j.1600-0722.2006.00336.x.
- 3) 花形哲夫・田村文誉・菊谷武他(夏目長門監修).認知症高齢者の口腔ケアの理解のために.東京:口腔保健協会,2011:49
- 4) 平野浩彦.認知症の人の円滑な食支援・口腔のケアを行うために.日本認知症ケア学会誌 2014;12(4):661-670